

平成人生

大学生・大学院生の多くは、平成生まれ、平成育ち。現状への満足度が高く、貪欲に何かを求めるより「現状維持」を志向する彼らの価値観を、彼らの生まれ育った時代に因んで「平成人生（人生ヨ平ラ成レ）」と名づけた。

人生ヨ平ラ成レ

「普通の幸せが得られれば……」「ごくごく平凡でいいです」——大学生たちに将来について尋ねると、少なからずこんな答えが返ってくる。彼らは、自身について「恵まれてる」（83・8%）、「いい時代に生まれ育った」（70・4%）と感じており、現在の生活への満足度も高い（74・7%）。将来の希望や消費への態度は極めて現実的で、浮ついたところがない。「今よりも自由に使えるお金が増えたら何に使いたいですか」という問いかけに対しては、「趣味」（63・0%）に次いで「貯金」（61・0%）が2位。将来したいことすべてを選んでもらう設問で過半数が○をつけたのは、「マイホームを建てたい」（54・3%）「車を所有したい」（54・2%）の2項目のみという結果である。

「高級住宅街に住みたい」（11・2%）とか、「高級車を所有したい」（15・6%）、「高級ブランド品を身につけたい」（14・3%）、「高級レストランで食事をしたい」（20・0%）といった「高級」志向は総じて弱い。また、グローバル化が進む中に育ってきた年代であるにもかかわらず、「国際結婚をしたい」（8・0%）、「海外で働



きたい」(15.8%)、「海外留学したい」(20.2%)といった、外へと向かっていく意識も強くない。

現在18歳から24歳の大学生・大学院生の多くは、平成生まれ、平成育ち。現状への満足度が高く、貪欲に何かを求めるより「現状維持」を志向する彼らの価値観を、彼らの生まれ育った時代に因んで「平成人生(人生ヨ平ラ成レ)」と名づけた。調査結果を振り返りつつ、「平成人生」志向の背景にあるものや、将来に向けた方向性を探ってみよう。

価値を増す「平成」

若くして「平成」を望む大学生たちの姿は、常に「もっと上」「もっと豊かに」「もっと新しく」といった価値を目指してきた上の世代の目には、どこかつまらなく、頼りなく映る。「恵まれすぎて、向上心に欠ける。『平』より『上』を指さないか」と。しかし今回の調査結果を見ていくと、どうも大学生たちの感じている「平」の意味は、上の世代のそれとは違ってきているようなのである。

彼らは、「自分は恵まれている」と

感じる一方で、「いい時代がこれからも続くとは限らない」と考えている。「これからの日本はどうなっていくか」を尋ねた結果では、全体の半数以上(52.8%)が「今より悪くなると思う」と答え、自身の将来についても「不安のほうが多い」(59.0%)が「期待のほうが多い」(41.0%)を上回っている。

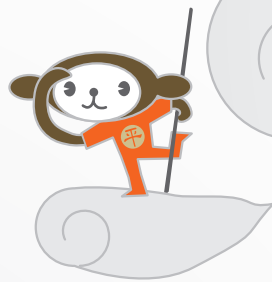
「将来、自分の両親以上の生活レベルを実現できると思うか」という設問では、「できると思う」(59.2%)が優勢ではあるものの、約4割が「できない」と思っている。

彼らは、人口も経済も右肩上がりの成長を続ける時代から、「成長」が前提とならない時代への変化の中で育ってきた。新成人数は08年・09年と2年連続で過去最低数を更新し、「少子化」を肌で感じていもいる。この他にも、「地球温暖化の進行」(74.2%)や、「資源・エネルギー不足」(73.2%)、「政治不信」(68.4%)、「学力低下」(66.6%)等、さまざまな領域で「今より悪化する」との予測が大勢を占めている。これからの時代は、温暖化を「食い止め」、資源不足を「補い」、政治への信頼を「取り戻す」…、「右肩下がり」のさまざまな要素を、まずは

「平」な状態に近づけることが求められている。その中であって、大学生たちが「平成人生」を志向することは、ごく自然なことのように思える。たとえ動いていないように見えても、押し流されそうな川の流れの中で踏みとどまるには、大きなエネルギーが要るからだ。

大学に求めるもの

大学生たちの「平成志向」が、「今のままでいい」という安易な態度とは異なることは、大学という場に対する彼らの態度にも表れている。大学の意味について尋ねた設問(3つまで選択)では、「より高度な専門知識を獲得する場」(62.6%)と「より幅広い知識や教養を身につける場」(62.1%)を挙げる学生が多く、これに「よい友だちや先生と巡り合う場」「よりよい就職をするための準備の場」が続いている。「社会に出て仕事を始める前に遊んでおく場」(14.7%)や、「とりあえず通過することに意義のある場」(12.6%)を挙げる学生は少数派だ。1週間あたりの通学日数が平均4.4日と多いことから、真面目に大学に足を



運ぶ姿が浮かび上がってくる。また、大半(75・3%)の大学生・院生が学費のすべてを保護者に負担してもらっている一方で、自身の負担分(奨学金を含む)の方が多い学生も約1割(保護者に経済的なゆとりがない家庭では2割)いることも注目されよう。

さらに、「将来社会人として仕事をしたい」のために、今後どのような力を伸ばしておきたいと思えますか」という問いに対しては(3つまで選択)、「実行力」(44・6%)、「主体性」(36・4%)、「創造力」(33・4%)を挙げる学生が多い。少なくとも意識の上では、受け身ではなく、自ら積極的に行動していかなくては、という姿勢がうかがわれる結果となっている。

新たな働き方の模索

将来の働き方に関する設問では、「組織の中で働きたい」(70・2%)、「ひとつの企業の中でキャリアを積んでいきたい」(66・4%)、「就職先は雇用の安定した大手企業を選びたい」(63・5%)と、「安定した環境の中で働きたい」との意識が表れる結果となっている。また、「高い職位や報酬よりも働きがいや達成

感を優先させる」(69・7%)が7割を占め、強い「働きがい」志向が示されている。ワークライフ・バランス(仕事と生活の調和)志向も強く、「今の日本は仕事と家事・育児の両立環境が整っている」と感じている人はわずか1割(10・9%)であるにもかかわらず、4割を超える女性が「結婚・出産にかかわらず、仕事を続けたい」と思っている。また、4割(41・7%)の男性が、育児休業の取得を希望している。

興味深いのは、「仕事を生きがいにしたいと思うか、思わないか」「組織の上でのポジションを目指したいか、自分のペースで楽しく仕事をするほうが良いか」「残業が少なく自分の時間をもてる職場が良いか、残業が多くてもキャリア・専門能力を高められる職場が良いか」「会社の行事に積極的に参加したいと思うか、思わないか」…等、多くの項目で価値観が両極に分かれたことである。男女別に見ると、全体的に男性のほうが「キャリア」や「ポジション」を重視する傾向が強いのだが、ここではむしろ男性同士・女性同士でも考え方が分かれている点に注目したい。たとえば、「組織の中で働くとするば、できるだけ上のポジションを目指してがんばりたい」という男性(58・8%)は女性(42・1%)と

比べると多いが、一方で4割以上が「管理者としての責任を負うよりも、自分のペースで楽しく仕事をしたい」と答えているのである。

「安定志向」ばかりが目される大学生たちの仕事観だが、その実、仕事や働く場に求めるものは非常に多様化していることがわかる。そしてそこには、親の世代とは違う、自分らしい働き方を模索する彼らの姿が読み取れる。

自由と多様化の中で

家族観に関する設問では、大半の大学生が将来「結婚したい」(84・0%)、「子どもをもちたい」(80・8%)と答えている。結婚や子どもに関する発言はインタビューや自由記述の中でも非常に多く、人生に欠くことのできない一部ととらえられていることがうかがえる。

ところが、彼らに「人は結婚しなくても、十分に幸せな人生を送ることができると思うか」と尋ねた結果でも、過半数(56・1%)が「YES」と答えている。一見相反するこれらの結果は、「自分が結婚したいかと問われれば答えは『YES』、しかし、それが唯一の解とは限らない」と、自分とは異なる価値観を尊重

しようとする彼らの姿勢の表れと考えられる。

同様の傾向は、将来のライフコースに関する希望を尋ねた設問にも色濃く現れている。この設問は、女性には自身の将来の働き方、男性には将来の配偶者の働き方について、「結婚・出産にかかわらず、仕事を続けたい／続けてほしい」「出産を機に退職・休職し、子育て後に再び仕事に就きたい／就いてほしい」など、複数の選択肢の中から希望に近いものを選択を求めたのだが、男性の4人に1人（26.4%＝選択肢の中で最多）が、「特に希望はない／わからない」を選択している。結婚自体がまだ先のことであるから、「わからない」が多くなるのは当然

とも言えるが、自由記述には「相手の意思を尊重したいから」「相手の自由なので」といった記述が目立ち、「夫婦とはいえ、自分の価値観を相手に押し付けるべきではない」との意識がうかがわれる。「本音で話せる友だち」がいて（79.5%）、「与えられた環境下で周囲とよい関係を築ける」（72.1%）自信もある。一方で、「友だちから仲間はずれになるのが怖い」（64.7%）、「人付き合いは面倒だと思ってしまう」（57.8%）という面も併せ持つ――彼らは、他者との適切な距離感を測りかねているようにも見える。

次代への最適解を求めて

「右肩上がり」の成長が前提とはならない時代にあつて、大学生たちが「平成人生」を志向するのはごく自然なことと言えよう。しかし、従来のやり方を単に「維持」するだけでは、親の世代と同じ豊かさを手にすることも難しいかもしれない。意識的にではないにせよ、彼らはそのことに気づき、従来のモデルに頼らない、新しい「豊かさ」への最適解を模索しているように見える。

最適解へと辿り着く過程では、他者との関係性も常に「平」というわけにはいかないだろう。しかし、相互の価値観を尊重しつつ、必要であればぶつかり合い、そこから新たな解を見出していくことができる。彼らの多様性は大きな価値になるだろう。「平成人生」の「成」は、「成熟」に向かう「成」とも読むことができそう。

鷲尾 梓（わしお あつせ）

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。2004年4月よりHR1研究員。次世代のための学びの場研究や「てら子屋」事務局、豊かな暮らしをもたらすワーク・ライフ・バランス等をテーマとした調査研究、国内外での生活価値観調査を担当。共著書に「男たちのワーク・ライフ・バランス」（幻冬舎ルネッサンス）。